
石榴の種

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

石榴の種

【Nコード】

N13670

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

孤独にうちひしがれたハーデスは妻として女神ペルセポネーを得た。だが彼女を手放さなければならなくなったその時女神が取った行動は。ギリシア神話にあるお話から書きました。

第一章

石榴の種

「愛が欲しい」

彼は地の底でいつもこう思っていた。

「愛が欲しい。何故私にはそれが無いのだ」

「ハーデス様、愛がですか」

「愛と仰いますか」

玉座に座るその黒い髪と目を持つ男に左右から声がした。それぞれ金色の髪と瞳、銀色の髪と目の男達だ。若く美しい顔立ちの彼等がその整っているが暗い顔の男に対して声をかけたのだ。

「ではお妃をでしょうか」

「お妃を望まれるのでしょうか」

「ヒュプノス、そしてタナトスか」

その男ハーデスは二人の名前を呼んだ。彼は冥界を治める神でありこの世界の主だ。天界はゼウスが、海界はポセイドンがそれぞれ治めている。彼等は兄弟でありそれぞれ世界を分け合っているのである。

「そなた達か」

「はい、左様です」

「我々です」

彼等もその通りだと返す。ハーデスの傍に忠実に控えている。冥界の神々の中で彼等がハーデスの第一の側近なのである。

「それでハーデス様」

「お妃を望まれるならですが」

「どうすればいいのだ？」

ハーデスはそのことについて具体的に尋ねた。

「それでだが」

「まずはゼウス様にお話してみてもどうでしょうか」

「あの方に」

「ゼウスにか」

ハーデスはゼウスの名前を聞いてた。その顔を考えるものにさせた。そのうえでの言葉であった。

「我が兄弟にだな」

「あの方はそういうことなら得意ですし」

「他の神々の追隨を許しません」

「そうだな」

それはその通りだった。ゼウスといえはである。そうしたことが何よりも得意ということであまりにも有名な神だ。決していい意味とは思えない意味である。そうした神であるのだ。

だからだ。タナトスとヒュプノスも彼の名前を出してた。そのうえで主であるハーデスに対して話したのである。

そしてだ。ハーデスもここで頷いたのである。

「わかった。それではだ」

「そうして頂けますか」

「わかった、それではだ」

「はい、すぐに」

「そうして頂ければ」

こうしてハーデスはゼウスと会うことにした。自らオリンポスに出向きだ。その白い髪の厳しい顔をした男に会った。顔は整っていて若いがそうした顔である。

ハーデスはそのゼウスと会ってだ。まずこう話した。

「妻が欲しいのか」

「そうだ」

まさにそうだというのである。

「愛を欲しい」

「愛なぞ幾らでもないか？」

ゼウスは己の兄弟に返した。何でもないといった口調だ。

「それは」

「そちらにはあつてもこちらにはない」

だがハーデスの返す言葉はこれだった。

「残念だがな」

「冥界にはないか」

「天界にはあつてもだ。そもそもそなたにはヘラがいるではないか」

ゼウスの正妻であり出産と夫婦の幸せを司る女神である。もつと

もゼウスの浮気のせいとその夫婦仲は決していいものとは言えない。

「違うか？」

「まあそれは置いておいてくれ」

ヘラの話を出されるとどうしても弱いゼウスだった。彼にしても

やましいところがありそれはどうしても反論できるものではなかつ

たのである。

「それでだが」

「私の妻だが」

「一応相手はいる」

それはだというのだ。

「安心してくれ」

「そうなのか」

「ほら、デメテルがいるな」

ゼウスが今度出てきた名前はそれだった。

「わかるな」

「我等の姉妹ではないか。そしてそなたとは」

「わかるな。娘がいるな」

「ペルセポネーか」

ここで名前がわかった。ハーデスも知っている名前でありそうした相手だった。他ならぬゼウスとデメテルの間に生まれた娘である。

第二章

「あの娘か」

「どうだ、あの娘で」

「こうハーデスに言うのだった。」

「悪くないと思うが」

「そうだな。あの娘ならばな」

「その通りだな。ではだ」

ハーデスもそれで決めた。なおゼウスはここで兄弟に対してこうも言った。

「ただしだ」

「どうした？」

「このことはデメテルには言わぬ」

「そうするというのだ。」

「よいな、わしは言わぬ」

「それはまたどうしてだ？」

「あれは娘から離れることはない」

「デメテルのことを話すのである。」

「それも決してだ。離れることはない」

「だからか」

「だからだ。ペルセポネーが嫁ぐと聞いてもだ。それではいそうですかと頷くようなことはないからな」

「しかしそれでは」

ハーデスは兄弟の言葉を聞いてだ。腕を組んで難しい顔になった。そうしてそのうえで話すのだった。

「デメテルに悪いのではないのか？」

「何、気にすることはない」

しかしゼウスは至って平気である。こうしたことには自分自身のこと慣れているからであろう。それについても話すのであった。

「全くな」

「そうか。わかった」

それで頷くハーデスだった。こうして話は決まった。

その時ペルセポネーは一人だった。

淡い栗色の豊かな髪に緑の澄んだ瞳を持つ楚々とした少女である。その彼女が野原で一人花を摘みにこやかに笑っている。

彼女は小唄さえ口ずさみながら花畑の中で白い花々に囲まれている。白い服もその花達も日の光に照らされ眩いまでに輝いている。その彼女のところにだ。

突如としてハーデスが現われてだ。彼女を小脇に抱えてしまったのだ。

「えっ!?!? 一体」

「ペルセポネーだな」

ハーデスはその小脇に抱えた彼女に対して問うた。

「そうだな」

「は、はい」

戸惑いながら応える彼女だった。

「その通りですけれど」

「わかった。ならそなただ」

「私とは」

「そなたは私の妻となる者だ」

こう言うのだった。

「わかったなら来るのだ」

「貴方は」

「我が名はハーデス」

彼もまた名乗った。

「そなたの夫になる者だ」

「何故、私はまだ」

「話は後です。さあ来るのだ」

「お母様、ですがお母様が」

「デメテルに対しても後で言う」

今は言おうとはしない。ゼウスとの話の結果だ。それはもう決ま
っていることなのである。

「それではだ」

「そんな、お母様！」

小脇に抱えられながらも何とか抵抗し助けを呼ぼうとする。

「ここにいらして。早くここに」

「無駄だ、デメテルはここには来ない」

ハーデスの言葉はここでは無慈悲なものに聞こえた。

そうしてだ。彼女をそのまま地下の奥に連れて行く。冥界の玉座
に連れて行きだ。彼女を正式に妻に迎えたのである。

その時だ。ハーデスはそのペルセポネーに対して語った。

「そなたは永遠にここにいるのだ」

「この世界に」

「そうだ、この世界にだ」

こう話すのである。

「わしの妻としてだ」

「私は」

彼女は今まで晴れやかな世界にいた。だがここは暗く冷たい場所
だ。それでこの世界が気に入るかというと到底無理な話であった。

第三章

それで断ろうとする。しかしハーデスはここで言うのだった。

「そして」

「そして？」

「私の傍にずっといてくれ」

「貴方の傍に」

「そうだ、私の傍にだ」

「こう言うのである。」

「共にだ。いてくれ」

「それは何故でしょうか」

ペルセポネーの言葉が今の彼の言葉と顔に僅かだが頑ななものが消えた。そうしてその顔で彼に対して尋ねたのである。

「一体どうして」

「私は今まで一人だった」

「この世界にですか」

「だからこそだ。共にいてくれ」

「こう話すのである。」

「それが私の願いだ」

「そうなのですか」

「そうだ。いいか」

ハーデスの目を見た。今の目は違っていた。彼女を見てだ。そのうえでの目であったのだ。

そしてその目だ。また言うハーデスだった。

「ここにいてくれるか」

「はい」

その目を見てはペルセポネーは頷くしかなかった。そこに彼の心を見たからである。それで彼女は今彼の言葉に対して頷いたのであった。

「それでは今から」

「宜しく頼む」

こうしてペルセポネーはハーデスの妻となり冥界の王妃となった。しかしデメテルはこのことを知らない。それで彼女は世界を彷徨い娘を探していた。

これは思いも寄らぬ災厄を引き起こしてしまった。彼女は季節と豊穰の女神である。その彼女が己の責務をせずに彷徨うとなると大地は枯れ恵みは消え去った。そして冷たい嵐が吹き荒れる。世界は滅びようとさえしていた。

それを見たゼウスは流石に捨て置くことができなくなった。それでデメテルに対して真実を話したのである。

「実はだ」

「はい、娘は一体何処に」

「冥界にいる」

そのペルセポネーがそのまま豊穰になったかの様な美しい女神への言葉だった。

「あの世界にだ」

「冥界に！？では娘は」

「死んではいない」

それは保障した。それに神は死なないのだ。

「それは安心せよ。神ではないか」

「そうですね。ですがどうして冥界に」

「ハーデスの妻になつたのだ」

「ここでも真実を話した。」

「それで冥界にいるのだ」

「それでなのですか」

「あの娘はそこにいる」

ゼウスは己の姉妹でもある女神にそのことを話し続ける。ここに至っては真実を話さなければ全てが終わるとわかっていたからだ。

「そこにだ」

「すぐに返して下さい」

デメテルは切実な言葉で懇願した。

「すぐに。あの娘を」

「わかった。このままではだな」

「娘がいなくては何もする気が起きません」

その切実な声での言葉である。

「私にはあの娘が全てなのですから」

「そうだな。それはな」

デメテルの娘への愛は尋常なものではない。殆ど常に傍にいる程だ。そしてその娘がいなくなって今がある。それでももう明らかだとだった。

「では。ハーデスにそう伝えよう」

「御願いです、すぐにです」

また言うデメテルだった。

「すぐに娘を私の下へ」

「わかった。仕方ないな」

兄弟との約束を反故にすることには内心舌打ちしていた。しかしそれでもこのままでは世界に何もかもがなくなってしまう。デメテルの力がどうしても必要なのだ。これでは仕方のないことであった。

こうしてペルセポネーはデメテルの下に返されることになった。

ハーデスも世界の実りがなくなるとあっては頷くしかなかった。どうしてもだ。

「仕方ない。それではな」

「はい、それでは」

「このまま」

「デメテルの下に返す」

ハーデスは無念の声でヒュプノスとタナトスに応えた。

第四章

「それでいいな」

「ではペルセポネー様を御呼びしましょう」

「すぐにここに」

「わかっている。それではだ」

「ですがハーデス様」

「一つ方法がありますか」

「ここで二柱の神はだ。こゝ主神に囁いてきたのだった。

「それをさめますか？」

「どうでしょうか」

「あれをか」

ハーデスは彼等の言葉を聞いて述べた。

「あれをするのか」

「そうです、あれをです」

「如何でしょうか」

「そうだな」

ハーデスはまずは一呼吸置いた。そのうえでまた言つのであった。

「どうしたものか」

「そうされないのですか？」

「それは」

「卑怯ではないのか」

腕を組み難しい顔での言葉だった。

「どうかと思うのだが」

「ですがこのままではペルセポネー様は帰られます」

「それはあつてはならないことですが」

「いや、それはだ」

ハーデスはどうしても首を横に振ろうとはしない。とてもだった。

「やはりな」

「どうしてもですか」

「それは」

「私は止めておく」

彼は一応判断を下した。しかしそれでも彼等に対して言うのだった。

「だが。そなた達はそれで納得しないな」

「はい、申し訳ありませんが」

「やはり。我々としても」

「ならそうするといい」

二人のその考えは受け入れた。彼等も引かないと見たからだ。それであえて許してこう述べたのである。仕える者達の言葉を受けたのである。

「それではだ」

「はい、それでは」

「その様に」

二柱の神々はそれを受けて一礼して頷いた。こうして彼等はペルセポネーを返すことになった。すぐに冥界にデメテルが迎えに来た。

「本人が来るか」

「まさかとは思ったが」

ヒュプノスとタナトスはデメテルのその顔を見て難しい顔になった。当然ハーデスも一緒にいる。だが彼は暗い顔で何も言おうとはしない。

「まずいな、このままでは」

「あれはできないぞ」

「ペルセポネー」

困惑した顔の彼等とは正反対にデメテルの顔は喜びに満ちていた。誰よりも愛するその娘を見てだ。そのうえで笑顔になっているのである。

「よくぞここに」

「お母様、お元気でしたか」

「元気でいられる筈がありません」

それはすぐに否定する母神だった。

「貴女がいなくて。それでどうして」

「そうですね。それで」

「さあ、早く冥界に帰りましょう」

娘を今にも抱き締めかねない顔であった。

「今から」

「はい、それでは」

「さあ、今から」

また言うデメテルだった。

「地上に」

「お待ち下さい」

「暫し」

ヒュプノスとタナトスはお互いに顔を見合わせてそのうえで意を決した顔で頷き合ってからだ。そのうえで母娘に対して言ってきたのだ。

「お帰りになられる前に我等から贈りものです」

「これを」

こう言っ出て出して来たのは石榴だった。それを出してきたのである。

第五章

「お食べ下さい」

「どうか」

「何のつもりですか？」

デメテルは彼等が出してきたその石榴を見て険しい顔になった。

「それは」

「それはといいますと」

「一体」

「とぼけてはいけません」

全てを見抜いている言葉だった。

「冥界のものを食べればそれで冥界に留まらなければならなくなります」

「いえ、それは」

「それについては」

「私がそれを知らないと思っているのですか」

怯む二柱に対してさらに言うのだった。

「このデメテルが。ハーデス」

「うむ」

今度は己の兄弟に返した。ハーデスはこの場ではじめて言葉を出した。

「貴方は彼等を許すのですか。彼等のこれを」

「私は。それは」

「貴方達が何をして私も私は許しません」

デメテルも言う。それは断固たる言葉だった。

「何があるうともです」

「決してだな」

「そう、決してです」

ハーデスに対して答える。

「何があるともです」

「わかった」

ハーデスはデメテルの言葉を沈痛な顔で受けた。唇を噛んでいるのがわかる。彼としても受け入れられない言葉であったのだ。

しかしだ。それでも彼は頷いた。そうするしかなかったからだ。

「それではだ。ペルセポネーよ」

「はい」

「さらばだ」

こう言って彼女から背を向けたのだった。

「これでな」

「あの」

「さらばだ」

背を向けたままの言葉だった。

「それではな」

「左様ですか」

「帰るがいい」

そしてこうも告げたのだった。

「そなたの帰るべき場所にだ」

「ハーデス様……」

「私は一人でいるべきだった」

ハーデスはペルセポネーから背を向けようとはしない。それほどうしてもだった。望んでいたものを諦める。それは背中からよくわかった。

そしてそれを見たペルセポネーはだ。静かにこう言っただった。

「では私は」

「さあ、帰りましょう」

「いえ、その前にです」

母に対して静かに言ったのだ。

「あの」

「は、はい」

「何でしょうか」

ヒュプノスとタナトスに声をかける。彼等は焦った声で応えてきた。

「その石榴を」

「こう言うのであった。穏やかな声で。」

「頂けますか」

「しかしこれを食べれば」

「貴女は」

「そうよ、それは絶対に止めて」

デメテルも彼女の後ろから言う。言葉は必死のものだった。

「何があっても」

「その石榴の実を食べれば」

だがペルセポネーは言葉を続ける。ヒュプノスとタナトスに対して。

「冥界にですね」

「はい、一粒で一月です」

「そうなります」

彼等も今は素直に述べた。それはどうしてもだというのだ。

「それで宜しいのですか？」

「ですが」

「四粒頂きます」

ペルセポネーは暫く考えた。そうしてそのうえで言うのだった。

母の顔も見てだ。それから考えてこう告げたのである。

「それだけを」

「四粒ですか」

「では四ヶ月」

「こう言つて石榴を彼等の手から受け取つた。そして自ら割りその四粒を口に含んでみせた。それから話した言葉はこうしたものだった。

「これで」

「ペルセポネー、これは一体」

「一年は十二ヶ月ありますね」

彼女は怪訝な顔で自分に問う母神に対して顔を向けて話した。

「そうですね」

「ええ、そうだけれど」

「ですから。私は八ヶ月はお母様のところにて」

「八ヶ月は私のところに」

「そして残りの四ヶ月は」

ハーデスに顔を向けての言葉だった。

「あの方の下で」

「いてくれるのか」

ハーデスはペルセポネーのその言葉を聞いて述べた。

「それでは」

「そうですね。貴方は私を愛してくれていますね」

「うむ」

ペルセポネーの言葉にこくりと頷く。それは事実だった。

「その通りだ」

「ではそれに応えます」

「そうするというのだ。」

「ですから」

「そうか。それでなのか」

「私は貴方の妻です」

「ここまで言った。」

「そしてお母様の娘です」

「私の妻……」

「そして私の娘」

「それ以外の何者でもありません。だからこそです」

微笑んでの言葉だった。彼女の周りは暗い筈だが温かい空気に包まれていた。そうだったのは全て彼女によるものだ。彼女の愛に應える心がそうさせたのであった。

石榴の種

完

2
0
1
0
・
4
・
5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1367o/>

石榴の種

2010年10月8日11時13分発行